地の奥に七十日をとざされてすくひだされていつか
死ぬひと　　矢部雅之

昨年八月のチリの鉱山落盤事故に取材。作者は取材カメラを持って現地に飛び、救出現場をじっさいに見ている。その体験を、一年後に、こううたっていることがショックだった。この暗さ、この無常感。救出のときの多くのひとたちのあの喜びは、何だったのだろう。

暑くない寒くないこの曖昧で摑みきれないほどの快適　　木村俊介

微温湯的な日常を否定的に見るのではなく、「快適」と表現したところ、同じ作者の「文庫本を読みつつパスタを茹でている村上春樹的な日曜日」のような「村上春樹的」な味が読める。

女優業地道な作業重ねつつライトをもらえば飛ぶ力あり　　矢代朝子

下句、多くの観客を前に舞台に立つ人だけにしか分からない感覚だろう。日生劇場「ガブリエル・シャネル」の舞台に立ったときの一連中の一首。ただ、上句は、説明的すぎる。

曾祖父と曾祖母の名を確かめる墓碑に積もりし雪を払いて　　田中拓也

鳥取県八頭郡桜町諸鹿という山里にある三代前の先祖の墓を訪ねた一連中の一首。「墓碑に積もりし雪を払いて」に、じっさいの行為以上の象徴的なイメージが読める。

## 短歌の現在

# No.373　今月の15首を読む

## 佐佐木幸綱

庭石の陰に銭苔傘を立つ雨降らば守らむもののあるらし　　高山美智子

ゼニゴケはてのひらのような傘をひらく。小さな命に注目、その生の営みをクローズアップして、やさしい歌にしあげた。

椋鳥をなかば隠せる蒲公英のまるきあたまに高き低きあり　　横山未来子

ごく低い視点から、丸いタンポポの綿毛の群れを見ているのだ。寝転んでいるのかもしれない。綿毛の群れの向こうにムクドリが歩いている。独特な視点の設定の工夫が新鮮。

雨の日のひとりの時間を連れてきてぽつぽつ座る映画館（ミニシアター）に　　鈴木陽美

意味的には、雨の日に一人で映画館に来ているというだけだが、それだけの内容を、人生の一場面の歌に仕上げた気合いが、いい。主語は、「われ」ではなく「われわれ」。映画館に一人の時間を連れて来ている「われわれ」が主語である。

窓からは天候分からぬ夕つ方電話数本内示まだなし　　黒岩剛仁

会社内の人事異動に取材した作のうちの一首。内示を待っている間の落ちつかない気分である。書類を見たり電話を受けたりしながら、時に、窓の外を見たりしているのだ。上句の表現、的確。

推敲に推敲かさねつたなくも詠まねばならぬ大地震（なゐ）